

# “岡崎を学び、岡崎を知り、岡崎について考える”

# 岡崎学

「岡崎学」岡崎を考える

【会場】

コミュニティサテライトオフィス  
(松坂屋岡崎店6階)

10/13のみ 龍海院(明大寺町)

【時間】

午前10時30分～11時30分

【受講資料代】

1,000円(8回通し)

(学生は無料 ※当日証明できるものをお持ちください)

※6回以上出席の方に修了証を発行いたします。

※サテライト事務局に、直接申込みにお越し  
いただいた先着100名に昨年度の講演録を  
配布します。



お申込・お問合せ

サテライト事務局(松坂屋岡崎店6階)

TEL: 0564-65-8561

FAX: 0564-65-8565

## 10/6(土) 岡崎発の「蝶々」～学校唱歌の源流をめぐって～



岡崎女子短期大学  
上田道准教授

「ちょうちょう ちょうちょう 葉の葉にとまれ…」の出だしの文部省唱歌「蝶々」は、スペイン民謡のメロディーに日本語の詞をつけた唄で、早くも明治14年刊行の教科書『小学唱歌集』に掲載されています。一番の歌詞は愛知県師範学校の野村秋足(あきたり)によって明治の初めに尾張地方で採集されたわらべ唄がベースになっていますが、江戸時代の文献には三河の岡崎女郎衆の唄なのだという意味のことが書かれています。講演では、岡崎発のわらべ唄と日本の学校唱歌の意外な関係についてお話ししたいと思います。

## 10/13(土) 龍海院(是字寺(ぜのじでら))を知る



龍海院  
副住職  
池田友厚師

家康の祖父、松平清康が20歳のとき、「是の字」を左手に握る夢を見ました。夢の意味を龍溪院(桑原町)の模外和尚にたずねると、「是の字は、日・下・人の3字となり、天下人のこと。3代のうちに天下をとる。」と解いたのです。喜んだ清康が和尚のために城の対岸に建てたのが龍海院といわれます。今回は徳川家との関り、寺のおこりなど龍海院についてお話いたします。

## 10/27(土) 地域性とデザイン



愛知産業大学  
杉田圭司教授

最初に私が関わった「岡崎市歩行者用サイン計画」について述べたい。これは国土交通省、愛知県、岡崎市による共同事業である。2番目に大学として地元商店街組織「未来城下町連合」との産学協同事業についてである。東岡崎駅前から中心市街地にかけての街路灯に掲げるフラッグデザインである。年間5種類のフラッグデザインを本学デザイン学科のグラフィックデザインコースの学生に制作させている。3番目は、岡崎市果樹振興会のブドウ加工品のデザイン協力である。ブドウのワイン及びジャム製品のラベルデザインとその販促ツールであるポスター制作について述べたい。

## 11/10(土) 朝鮮通信使と御馳走屋敷



合名会社備前屋  
代表社員  
中野敏雄氏

永かった戦国の世の中を終焉させ泰平な世の中を築くため、隣国朝鮮の李王朝との友好関係を大切にしようとした徳川家康。また、秀吉の朝鮮侵略により荒廃した国土の復興と、日本に連れ去られた朝鮮の同胞を連れ戻すため徳川幕府との国交を必要とした李王朝。両国の思いが一致して始まったのが「朝鮮通信使」であります。「朝鮮通信使」は岡崎宿で江戸幕府の公式な出迎えをうけることを通例としており、岡崎藩の迎賓館として籠田総門近くに立地した「御馳走屋敷」を常宿としていました。そこでの朝鮮通信使に対する大変懇切丁寧な供応が今に伝えられています。

## 11/24(土) 「ふるさと岡崎」を考える～伝承の世界から学ぶ～



岡崎大学  
校長  
野本欽也氏

“ふるさと”は空間的にも時間的にも人にとって、自己の存在を確認する座標の原点となるものであると捉えています。実在でも、想像上でもよいのです。だからこそ、“ふるさと”は母体帰郷、お袋さんのイメージと重なり、自分を見失ったときに帰る場となり、始原の時となるのです。現代の日本人は、心のふるさと、つまり、自分自身の原点を見失っているのではないのでしょうか。実在の故郷も、全国的に一律化してしまい特徴がなくなってしまっている状態です。そこで、是非、“ふるさと”論議を地域振興、地域理解などの問題も含め、学問論・実践論の柱として展開していきたいものと考えています。そして、地域理解を子どもとともに歩み、伝承の世界からこれからの「ふるさと岡崎」構築に向けてのヒントが得られれば幸いです。

## 12/1(土) 岡崎市電ものがたり



日本路面電車同好会  
会員  
藤井建氏

岡崎市内から路面電車(名鉄岡崎市内線)が姿を消して、今年で45年になります。岡崎の市電と呼ばれ親しまれていた路面電車が走っていたことを知る市民も少なくありません。明治31(1898)年末に開業した馬車鉄道をルーツとし、大正元(1912)年9月1日から昭和37(1962)年6月16日まで50年間にわたって市民の足として活躍した岡崎の路面電車について、その成立から終焉までを残された絵葉書や写真を交えて紹介したいと思います。モータリゼーションの萌芽期と共に姿を消した岡崎の路面電車の懐かしい風景に当時を思い出していただければ幸いです。

## 12/22(土) 都市の風格、岡崎の風景～中心市街地の活性化を目指して～



人間環境大学  
石上文正教授

金沢には兼六園、水戸には偕楽園、岡山には後楽園があり、それぞれの町に風格を与え、市民の誇りとなっている。では、岡崎には風格があるのだろうか?街づくりの「核」として、私は「公園・庭園都市、岡崎」を提案したい。都市の中に公園・庭園があるのではなく、「公園・庭園の中に都市がある」という街づくりの提案である。公園・庭園都市によって、「風格ある都市、岡崎」ができあがるだろう。どこにでもあるような街ではない、市民が誇れる街になるだろう。岡崎には、その「天才的な素質(資源)」がある。その素質は、一言で言えば岡崎の「風景」である。

## 1/12(土) 岡崎の文化と歴史～明治・大正・昭和～



愛知学泉大学  
岡田洋司教授

岡崎は、古い伝統をもつ西三河の中心都市です。そして、明治・大正・昭和の三代にも、その西三河の中心都市らしい文化を築いてきました。近代の岡崎の文化は一面では、俳句などに代表される近世までの伝統的な文化を受け継いでいます。しかし、同時にあたらしい近代的な文化も摂取してきました。この二つの面が、場合によっては対立しつつ、しかし最終的には融合しつつ存在しているのが岡崎文化の特徴です。そこで具体的には岡田撫琴・柴田頭正・近藤孝太郎などを例に、俳句・歴史・美術などさまざまな側面にわたりお話ししたいと思います。

主催：岡崎大学懇話会、NPO法人21世紀を創る会・みかわ 後援：岡崎市、岡崎市教育委員会、岡崎商工会議所